

家族の快走録 第十六回

映画狂想曲Ⅱ

藤原美子



英国ケンブリッジ大学でシュワッチ1 1987年。

「ミセス」 2008年7月号 (No. 642)

掲載ページ： P228～229

文化出版局発行

夫の父、新田次郎の『劔岳 点の記』が映画化される。その映画の隅にエキストラとして三人の息子たちと私が参加することになった。衣装合わせは撮影より三ヶ月ほど前のある日、練馬の大泉学園にある東映撮影所で行われた。私の役は年輩の明治の女性である。たくさん吊るされた着物の中から深緑色の地に亀甲柄の小

紋が選ばれ、刺繍入りの淡いねずみ色の帯に薄紫の帯揚げが合わせられた。地味だがとても上品な取り合わせだった。私は別室で着物に着替えると、日本髪を合わせるようになった。地毛の前髪と左右の髪を少しづつ残し、それ以外の髪を後ろでゴムで縛ってまとめた。そこに七分髪と呼ばれるものをかぶせるようにのせて固定し、先ほ

ど残した髪を鬘になじむように油をつけてなでつけていく。すると生え際は地毛なので、あたかもすべて自分の毛で結ったように仕上がるのである。思い起こしてみれば、日本髪ははるか昔、結婚式のとき以来だった。久しく胸の奥底深くに眠り、思い出すことのなかったあの日の記憶が、一挙に浮きびがってきた。私はお色直しでウエ

ディングドレスから和服に着替えた。鬘の重さとこめかみを締め付ける痛さ、そして妙な格好の自分をさらさなければならぬ恥ずかしさで、披露宴の間、私はずっと下を向いたままだった。横にいる夫ものぼせたような赤い顔をしていた。私と結婚する幸せに上気していたのならこんな嬉しいことはないが、そうではなかった。夫はすぐ隣に

仲人の小平邦彦先生がいらつしやるというだけで気絶寸前なのであった。小平先生は数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞を受賞なさった大数学者で、数学者の端くれである夫にとって先生は神様以外の何者でもなかった。その神様と席を並べるとは天皇陛下と並ぶようなもので、あまりにも畏れ多いことだったのである。神経がとりわけ繊細な夫のことゆえ、「冥たけなわに新郎、失神」という最悪の事態が起こらないとは限らなかつた。夫はそれを危惧して、飲めないブランドーを流し込んでいたのである。

そんな昔のことを考えていたら、髪が出来上がった。かつての結婚式のときのような鬘の重さや痛さはない。しかし気恥ずかしさに変わりはない。まだこの年になつても私に恥じらいという奥ゆかしさが消失していない証拠であつた。監督をはじめ大勢のスタッフの待つ会議室の戸をおそるおそる開けた。部屋いっぱいにこだましていたおしゃべりがびたつと止み、皆が一斉に私を凝視するのを感じた。いっさいの音が消え、真空のような時間が流れた。私は身を縮め、苦笑いした。するとそのとき「その目尻の皺、メイクさんに描いてもらったの？」という大きな声が響いた。夫だつた。私はいよいよ恥ずかしさで身を縮めた。あわててプロデューサーが「いやいや似合っていますよ」と言ってくれた。しかしいたつて正直な夫の感想に、厚塗り化粧のせ

いもあるけれども本当にそう見えるわね、と私は深く納得していたのである。

撮影は二日間にわたつて明治村で行われた。第一日目は浅野忠信さん扮する柴崎芳太郎がかつての上司である古田を尋ねてくるという場面である。私は古田の妻の役。「古田は今、近くに弓の稽古に行つております」と一言セリフがある。初めて浅野さんとお会いした。抜けるように白い肌と明るい髪の色、すつくと立つ彼は恥じらうような微笑をたたえていた。深緑色のネルの三つ揃いに真っ白なワイシャツを身にまとう姿はすがすがしく、なんとも言えない清潔感で満たされていた。女性に限らず万人が魅了される人物とは、おそらく彼のような人なのだろう。

撮影現場の幸田露伴邸の玄関前にはライトを反射する畳二枚分ほどの大きさの白い板が何枚も立てられ、集音マイクの付いた長い棒を腕いっぱい伸ばして掲げる人、光量を測る人、メイク担当、小道具担当など五、六十人の人たちが集結していた。「テスト行きまーす」と声が響いた。台本にはないが、私がやりやすいように浅野さんが「ほー」と言つてセリフを受けてくださる。「そんな感じ。できるだけにこやかにね」と監督から声がかかった。まったくどきどきしない自分に驚き、意外と女優の素質があるかも、とちよつぱり得意な気分になつた。太陽が雲に隠れば待ち、明治村のちんちん電車の音が遠くに響けば待ち、といった具合に事あ

るごとに待つた。「あと五分で太陽が現れます。待ち五分」と言う光量係のお兄さんの言葉は正確で、必ず五分後は太陽の光が射してくるのだつた。すべての条件が整い、ようやく「本番」と声がかかった。かちんと板が鳴つた。その途端、どうしたことだろう。心臓がばくばくと高鳴り、声は上ずり、呼吸と発声が合わず、それまで一度も失敗しなかつたセリフをとちよつてしまったのである。「すみませーん」と大声で謝り、再度挑戦。今度はうまく行つた。すると監督が「蜂がカメラをよぎつた。もう一度」と言つた。さらに雲が太陽をよぎるのをしばらく待ち、次の収録で「OK」となつた。ほつとして監督に挨拶に行つたら、撮影を冷やかに来ていた夫が「いやあ、僕のほうが気が足らなかつた。女房のように無神経な人間は上からないから有利ですわ」と言つた。監督が、わっはっは、と大空に向かって高らかに笑つた。

翌日は息子たちの出番である。息子たちはおじいちゃんのための、撮影の数日前に坊主刈りになつていた。場面は陸軍測量部、北里研究所を使つて行われた。実際に当時、測量に使われた機器が棚に並び、鈍く金色の光を放つていた。本棚には紺色のハードカバーの背に金字で各地の地名が刻まれた資料がぎつしりと収まつていた。機器は特別に国土地理院から拝借したものだが、本棚のものは小道具係苦心の作で、ハードカバーの中を開くと漫画本

が現れた。さすがに本業の俳優たちはテストのたびに少しずつ動きを変えている。あるテストで松田龍平君がいきなり次男の彦次郎に抱きついた。「驚いたでしょう。ここは二人が久しぶりに再会する場面だからどのように表現しようか」と言つた。握手では他人行儀だからと、互いに肩を叩き合うことにははらはらし、生きた心地がしなかつた。しかしテストを重ねていくうちに、皆が生き生きと流れるように動き出してきたのが感じられた。セリフに忙しい俳優たちの脇で寛太郎は大真面目に測量機材を磨き、彦次郎や謙三郎は測量機材を運んだりして立ち動いていた。

とつぱりと日が暮れて朝九時ごろから始まつた撮影が終了した。監督に敬礼を言いながら「今日一日で映画の何分くらいを収録できたのでしょうか」と伺つた。うーん、としばらく考え、監督は「四十秒くらいだな」と答えた。たったの四十秒。これだけの大勢が心血注いで撮つた四十秒を積み上げ、ようやく一つの作品になる。その気の遠くなるような作業に私は言葉を失つていた。

ふじわらよし

アメリカ・プリンストン生まれ。お茶の水女子大学で発達心理学を専攻、修士課程卒業。在学中に藤原正彦氏と知り合い、卒業後に結婚。近著「我が家の流儀―藤原家の闘子子育て―(集英社文庫)がある。

映画「鯉岳 点の記」は二〇〇九年初夏全国ロードショー予定。原作・新田次郎「鯉岳 点の記」(文春文庫)。監督、撮影・木村大作。出演、浅野忠信他。
<http://www.tsurugidake.jp/>